



柳田國男の生地「福崎町」を視察

◆丹波市・「健康たんば21」と「健康長寿日本2」の取組について  
丹波市は、生活習慣病による標準化死亡率が高く、また男女とも

◆福崎町・柳田國男と「遠野物語」について  
遠野市と福崎町が遠野物語の縁により友好都市を結ぶこととなる直前に視察したため、研修室及び柳田國男の生家等様々な場所まで、町長、教育長、議長までも立ち会っていただいたことには、誠に恐縮するばかりであった。福崎町では、柳田國男を知らしめるための教育副読本や彼の生家をはじめ、幼少期からの関係施設、松岡家記念館などが整備されており、松岡5兄弟の顕彰もしっかり行われていた。8月23日の協定を機に、福崎町との相互交流が深まり、情報発信していければと願う。

◆小野市・「おの検定」と「16ヶ年教育」の取組について  
「おの検定」とは、平成16年から小野市が独自に取組んだ学習システムで、小中学生の基礎学力・体力の養成がその主な目的であるが、平成17年から、東

に自殺の死亡率も高いことが課題であった。健康づくり重点5分野（栄養・食生活、身体活動・運動、こころの健康、タバコ、健康診査・健康管理）に力を注ぐことで大きな成果を生み出している。特に、思春期からの健康教室と題して、地元3校の高校生への食育講座を開設し、一人暮らしが始まる前に自分の食生活を考えて実際に調理させるなどの取り組みは、市と県の壁を乗り越えた活動として高く評価したい。市・教育委員会との連携、地元小中、高校との連携は、遠野市にとっても有効な健康づくりに結び付くのではないかと考える。

市（2度目の入賞）と釜石市の甲子川が第2位となった。この16回大会でグラプリとなった北川川では、護岸や深みには巨石をたくさん置き、一方では浅瀬を造り水生昆虫が羽化できるように環境を整え、堰堤の撤去も行っている。稚鮎も従前の琵琶湖

また、特徴的なこととして、小中連携による教師の相互の乗入れ授業や児童・生徒の交流により、学校不登校の出現率ゼロを達成した。おの「16ヶ年教育」とは、平成17年度から始まり、マインナー15歳から16歳までの16年間で3ステップに分け、まさに知・徳・体の向上に結び付けた教育方法であり、基本的な生活習慣の確立と「生きる力」の基礎を育成し、大きな成果を生んでいる。脳科学による教育とは、脳の司



小野市役所で研修

※松岡家……  
柳田國男は、松岡家の六男として生まれました。

令塔である前頭前野をどう鍛えるかであり、その効果的な方法を見つけ出し、実践することである。遠野市の教育現場や健康づくりにおいて、脳科学による推進策を一考してもよいのではないかと。

# 自伐型林業の取り組み 産業建設常任委員会行政視察研修

〔視察日程〕  
6月25日～27日

〔視察研修先〕  
高知県佐川町  
高知県津野町

〔参加議員〕  
多田誠一  
織笠孝之  
菊池充  
荒川栄悦  
照井文雄  
佐々木大三郎  
多田勉



自伐型林業に取り組む若者から現地で話を聞く

◆佐川町・「NPO法  
人士佐の森・救援隊」の取り組みについて  
これまでの森林作業は、森林組合や森林作業請負事業体に仕事を任せる「施業委託型」林業が主で生産性を重視し高性能機械による大規模皆伐は環境悪化の一因となった。更に林業に従事する人々も自然に山から離れ、中山間地域の衰退に繋がる。土佐の森救援隊は「自伐型」林業を復活させ、雇用の拡大、山林収入の確保、中山間地域の活性化を目指し、人材育成、技術指導、財政支援など総合的組織的支援を行い、林業、農業の副業を組み合わせ収入を確保することにによりUイターが増え地域の再生に繋げている。全ての山林を管理するためには、施業委託

型である森林組合の役割も大きいと考える。河川環境の悪化は四万十川も例外ではなく、河川環境を守るために誕生したのが「高知県友釣り連盟」であり、各河川の鮎を一か所に集め、女性や子どもも参加し、鮎の味で環境の違いを判断してもらおう「清流めぐり利き鮎大会」を開催している。全国の50河川の漁業協同組合などの参加により「山・森・川」の大切さを広く発信している。昨年度の16回大会では盛岡



日本一うまい鮎が採れる北川川

産から秋田・岩手産に変えた結果、冷水病による大量死が無くなり、大型の鮎が育ち、多くの釣り人で賑わっている。今後も当大会を通じて、河川環境の向上に繋げていくとのことである。

産から秋田・岩手産に変えた結果、冷水病による大量死が無くなり、大型の鮎が育ち、多くの釣り人で賑わっている。今後も当大会を通じて、河川環境の向上に繋げていくとのことである。